

情報に対する振る舞い傾向と対人関係スキルの関係性

石 川 真*

(令和2年8月31日受付；令和2年11月17日受理)

要 旨

本研究では、情報を他者との関係性の中でどのように捉えているかを探るために、他者と興味・関心に相違がある情報が話題となった際のコミュニケーション過程の振る舞いや他者との関わりを踏まえた情報収集の行動傾向について探ることを目的とした。特に、これらの傾向を社会的スキルの観点から探った。相手と興味・関心に相違がある情報に対する振る舞いと社会的スキルとの関連性は、社会的スキルの高い者ほど、同調や自己主張の傾向が高いことが示された。さらに社会的スキルの下位概念との関連性について分析した結果、同調はトラブル対処力、自己主張はコミュニケーション力、話題切替は問題解決力、コミュニケーション力と関連があった。情報収集の振る舞いと社会的スキルとの関連性については、社会的スキルの高い者ほど、新しい情報が気になる傾向、話題になっている情報をチェックする傾向が高かった。さらに社会的スキルの下位概念との関連性について分析した結果、コミュニケーション力が高い者ほど、新しい情報が気になる傾向、話題になっている情報をチェックする傾向が高かった。また、問題解決力が高い者ほど、情報の信頼性に注意する傾向、あらかじめ登録されている情報を何となくチェックすることが多い傾向が示された。最後に、情報に対する振る舞いについて、行動達成性の目標とコンサマトリー性の目標に分類してその傾向を検討した。

KEY WORDS

情報収集 information collection 社会的スキル social skills コミュニケーション communication
対人関係 interpersonal relationship

1 はじめに

新学習指導要領（平成29年告示の小学校学習指導要領・中学校学習指導要領、平成30年告示の高等学校学習指導要領）において、情報活用能力は言語能力や問題発見・解決能力等と並び、学習の基盤となる資質能力として位置づけられた。そして、情報活用能力を構成する資質・能力については、平成28年12月の中央教育審議会による「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）」において、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等の3つの柱を基に整理された。一方、平成18年に初等中等教育における教育の情報化に関する検討会による「初等中等教育の情報教育に係る学習活動の具体的展開について」において、情報活用能力を育成する情報教育の目標は3観点8要素で構成されることが示された。この情報活用能力を構成する資質・能力と情報教育の目標の3観点8要素の関連性の詳細については、文部科学省⁽¹⁾が示した情報活用能力の体例表において確認できる。たとえば、情報教育の目標の3観点の一つである情報活用の実践力の各要素は情報活用能力を構成する資質・能力の3つの柱で複合的に育成する指導のモデルが示されていると捉えることができる。したがって、3つの柱を通して従来の3観点8要素の育成がなされると解釈できる。

10歳から17歳の青少年を対象とした内閣府⁽²⁾の令和元年度の調査によると、インターネットの利用率は93.2%だった。また、総務省情報通信政策研究所⁽³⁾の平成30年度の調査によると、10代の青少年において以下の傾向が示されている。利用しているテキスト系ニュースサービスの1位はソーシャルメディアによるニュース配信が56.0%であり、「いち早く世の中のできごとや動きを知る」上で最も利用するメディアは、インターネットが61.7%、「趣味・娯楽に関する情報を得る」上で最も利用するメディアは、インターネットが76.6%、「趣味・娯楽に関する情報を得る」上で最も利用するメディアは、インターネットが83.0%だった。この調査結果より、青少年が日常的にインターネットから情報収集している傾向が確認できる。その一方で、文部科学省⁽⁴⁾⁽⁵⁾で得られた結果においては、小・中・高等学校いずれにおいても「必要な情報の主体的な収集・判断・表現・処理・創造」に関わるスキルが十分に育成されて

*学校教育学系

いるわけではない点が示されている。このことを踏まえ、文部科学省⁶⁾は情報活用能力の指導改善ポイントについて事例を挙げて紹介し、育成の支援をしている。

ところで、池田⁷⁾は人間の行動目標について行動達成性の目標とコンサマトリー性の目標の2つを挙げている。情報収集の行動についても、何らかの情報がある目的のために得る（行動達成性の目標）、ネット上に流れる情報を時間つぶしに得る（コンサマトリー性の目標）のように、2つの行動目標の傾向が考えられる。また、古谷・坂田⁸⁾は、対面、携帯電話、携帯メールでのコミュニケーション内容に注目し、対人関係の満足度にどのような影響を及ぼすか検討している。この中で、コミュニケーション内容を課題解決に向けた提案や情報提供に関わる課題的コミュニケーション、自己開示や情緒的サポートを含む情緒的コミュニケーション、単なるおしゃべりとしてのコンサマトリー的コミュニケーションの3つに分類し、コミュニケーション内容においても行動達成性の目標やコンサマトリー性の目標の双方を捉えることができることを示した。他者とのコミュニケーション過程においては何らかの情報共有がなされるが、その共有する情報源の収集が良好な対人関係を維持するために必要な情報、すなわち行動達成性の目標である場合もあれば、コンサマトリー性の目標によって得られた情報が偶発的に共有される可能性もある。すなわち、情報収集や判断に関する振る舞いがコミュニケーションや対人関係に影響を及ぼす可能性があると考えられる。

対人関係を深める過程において、たとえばLevinger⁹⁾は親密さの変遷を5段階に分類してそれぞれの特徴を示した。多くの研究でさまざまな分類が提案されているが、対人関係を形成しようとする初期段階、進展や維持する段階、崩壊する段階など、時間経過とともに相互の「親密さ」の程度は変化する特徴がある。このような他者と親密になろうとする際に、会話の内容に対する値観の共有や類似性を認知するなどの要素は重要である。ネット上において容易に収集できる多様な情報の中には、雑談・おしゃべりで共有される話題もあると考えられる。また下斗米¹⁰⁾は、対人関係の親密化過程の各段階において、役割行動の期待や遂行のズレと相手への満足・不満足にどのような関連が見られるか探っている。その結果、親密化の初期の段階（顔見知り段階）では、類似性は遂行度が期待度を上回るほど満足度が高い傾向を明らかとしている。

そこで本研究では、特に、他者との関わりにおいて重要な役割を果たす対人関係のスキルの一つである社会的スキルに着目し、情報に対する振る舞いの傾向を次の2点から探ることを目的とする。第一に、情報を他者との関係性の中でどのように捉えているかを探るために、他者と興味・関心に相違がある情報が話題となった際のコミュニケーション過程における振る舞いの特徴を探る。第二に、他者との関わりを踏まえた情報収集の行動傾向について探る。その上で、行動達成性の目標とコンサマトリー性の目標の観点から情報に対する振る舞いの傾向について検討する。

2 方法

2. 1 調査対象者・実施時期

情報教育関連科目の受講者である学部生および大学院生計150名（男66名、女73名、性別無記入11名）を対象とし、当該科目の授業最終回に実施した。調査は無記名で行った。また、倫理的配慮として、調査の実施にあたっては、研究の趣旨や個人情報等の取扱いに関して十分に説明を行った上で、回答者の同意に基づいて行われた。

2. 2 調査項目

調査項目は以下の(1)～(4)に示した尺度であった。なお、(2)～(4)はオリジナルの尺度である。

- (1) 社会的スキルを測定するための菊池¹¹⁾が作成した18項目で構成された尺度(KiSS-18)（5件法）。
- (2) 調査対象者自身が興味・関心のない事柄についてのメッセージのやり取りに関する9項目で構成された尺度（5件法）（表2参照）。
- (3) 調査対象者自身は興味・関心があるが、相手が興味・関心のない事柄におけるメッセージのやり取りに関する6項目で構成された尺度（5件法）（表2参照）。
- (4) 調査対象者自身の日頃の情報収集の行動に関する以下の6項目で構成された尺度（5件法）。
 - Q1. 興味(関心)がある情報は自ら検索してでも欠かさずチェックする
 - Q2. 興味(関心)のあるなしに関わらず、新しい情報が気になる
 - Q3. 興味(関心)のないものでも話題になっている情報はチェックする
 - Q4. 親しい人とのおしゃべりの話題のために情報をさがす
 - Q5. 情報の信頼性は注意する
 - Q6. あらかじめ登録された(自動通知される)情報をなんとなくチェックする

3 結果および考察

3. 1 社会的スキルの傾向

社会的スキルの傾向として、KiSS-18⁽¹¹⁾を分析した結果、社会的スキル尺度の信頼性係数は $\alpha = .89$ であった。さらに、因子分析（主因子法、平行分析により3因子を抽出、バリマックス回転、累積寄与率41.87%）を行った結果、表1の因子構造が得られた。従来の研究において、たとえば、石川⁽¹²⁾においては、「対人関係スキル」「コミュニケーションスキル」「トラブル回避スキル」「問題対処スキル」「マネジメントスキル」「対人配慮スキル」の6因子が抽出されている。また、石川⁽¹³⁾においては、「会話スキル」「トラブル対処スキル」「対人配慮スキル」「マネジメントスキル」の4因子が抽出された。今回はこれらの因子名、および、因子負荷量の高い項目内容を参考とし、第Ⅰ因子を問題解決力、第Ⅱ因子をコミュニケーション力、第Ⅲ因子をトラブル対処力と命名した。

本研究においては、社会的スキル尺度と相手と興味・関心に相違がある情報に対する振る舞い方の傾向や情報収集の傾向との関連性を探る。その際に、社会的スキルの全体の傾向においては、各対象者の全18項目の平均を指標とした。平均値は3.41（SD=0.59）であった。社会的スキルの3因子の傾向については因子得点を用いることとした。

表1 社会的スキル尺度の因子構造

項目	I	II	III	共通性
12 仕事の上で、どこに問題があるのかすぐにみつけることができますか	.77	.11	.22	.65
9 仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められますか	.68	.12	.19	.51
18 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じない方ですか	.61	.27	-.01	.44
11 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか	.51	.34	.12	.39
14 あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか	.45	.31	.31	.40
13 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか	.43	.14	.23	.26
15 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか	.24	.74	.19	.63
5 知らない人でも、すぐに会話が始められますか	.02	.69	.25	.54
10 他人が話しているところに、気軽に参加できますか	.34	.53	.16	.43
1 他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか	.24	.43	.28	.32
8 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか	.32	.43	.26	.35
17 まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていけますか	.27	.29	.17	.19
16 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか	.18	.22	.10	.09
4 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか	.17	.19	.73	.60
6 まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか	.18	.30	.69	.60
3 他人を助けることを、上手にできますか	.13	.20	.68	.52
7 怖さや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか	.34	.19	.39	.30
2 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか	.27	.34	.36	.32
寄与率 (%)	15.41	13.60	12.86	

3. 2 相手と興味・関心に相違がある情報に対する振る舞い方の傾向

調査対象者自身が興味・関心のない事柄についてのメッセージのやり取りに関する尺度および、調査対象者自身は興味・関心があるが、相手が興味・関心のない事柄におけるメッセージのやり取りに関する尺度の2つの尺度をまとめて因子分析（主因子法、平行分析により5因子を抽出、バリマックス回転、累積寄与率42.37%）を行った。共通性の低い3項目を除外して、再度、因子分析（主因子法、平行分析により4因子を抽出、バリマックス回転、累積寄与率45.56%）を行った結果、表2で示した因子構造が得られた。因子負荷量の高い項目内容を参考とし、第Ⅰ因子を送信の仕方、第Ⅱ因子を同調、第Ⅲ因子を自己主張、第Ⅳ因子を話題切替と命名した。各因子の因子負荷量の高い項目を確認すると、調査対象者自身が興味・関心のない事柄についてのメッセージのやり取りに関する尺度と、調査対象者自身は興味・関心があるが、相手が興味・関心のない事柄におけるメッセージのやり取りに関する尺度の双方の尺度で構成された因子は自己主張（第Ⅲ因子）のみであった。この因子は、調査対象者自身が興味・関心のない事柄の場合は、相手にそのことを伝えようとするのに対し、相手が興味・関心のない事柄の場合は、興味をもってもらえるようにする、利己的な特徴が見られる。一方、送信の仕方（第Ⅰ因子）、同調（第Ⅱ因子）は、前者の尺度のみ

で構成，抽出された。話題切替（第Ⅳ因子）については，後者の尺度のみで構成，抽出されたが，相手が興味・関心のない話題を変えるという，他者との関わりの中で，友好的な振る舞いを示唆していると捉えられる。

表2 相手と興味・関心に相違がある情報に対する振る舞い方の傾向の因子構造

項目	I	II	III	IV	共通性
8 相手に素っ気ないと感じるようなメッセージを送る	.75	-.17	.14	-.04	.61
6 いつもより時間をおいてメッセージを送る	.55	.02	.08	.30	.40
7 メッセージは送らない	.54	-.18	.08	-.03	.34
9 別の話題のメッセージを送る	.51	-.08	.11	-.02	.28
1 興味ある話題のときと同じような対応ができる	-.02	.93	-.14	-.05	.89
2 相手を失望させないメッセージを送ることができる	-.23	.52	-.01	.15	.35
4 相手の話題に興味を持とうと努力する	-.36	.45	.07	-.06	.34
5 相手に遠まわしに興味がないことを伝える	.26	-.11	.67	.12	.54
3 相手に興味がないことを伝える	.18	-.07	.67	-.06	.49
10 相手に興味をもってもらえるようにする	-.17	.27	.39	-.23	.31
11 話題を変える	.12	.26	.20	.64	.53
12 その話題をそのまま続ける	.08	.16	.26	-.56	.41
寄与率 (%)	14.50	13.30	10.20	7.50	

上記項目のうち，1～9は調査対象者自身が興味・関心のない事柄についてのメッセージのやり取りに関する尺度に該当する。また，調査対象者自身が興味・関心がない事柄についてのメッセージのやり取りに関する尺度で採用した「言われなくても相手は興味がないとわかる方だ」「相手が興味をもっていないのか確認する」「相手が興味ないと気づいたとき，不快な気持ちになる」は，共通性の低い項目として削除した。

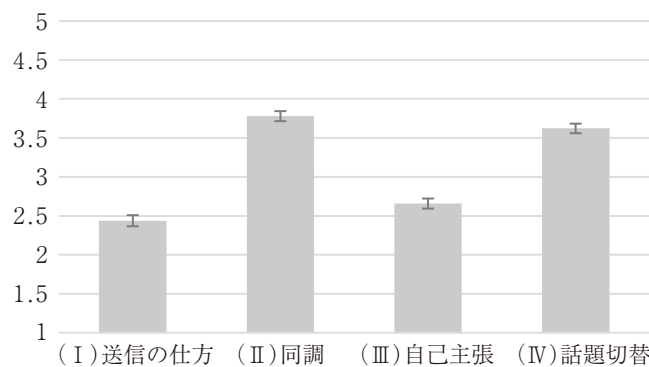


図1 相手と興味・関心に相違がある情報に対する振る舞い方の傾向
エラーバーは標準誤差を示す。

各因子の特徴を探るために，各因子負荷量の高い項目の素点平均を求め，各因子の指標とした（図1参照）。続いて4因子による1要因分散分析を行った結果，有意だった（ $F(3,441) = 104.02$, $p < .001$, $\eta^2 = .35$ ）。そこでHolm法による多重比較をした結果，同調因子（第Ⅱ因子），話題切替因子（第Ⅳ因子）間を除いてすべての因子間で有意差が見られた（ $p < .05$ ）。同調因子（第Ⅱ因子）においては，興味・関心の異なる話題の時に，いかに他者と上手に対応するかに関する因子であり，素点平均そのものも比較的高く，他の因子よりも有意に高い傾向が示された。また，話題切替因子（第Ⅳ因子）も比較的高く，上手に話題を切り替える傾向があることが示された。一方，送信の仕方については（第Ⅰ因子），やや抑制気味の傾向が示され，他の因子に比べても低かった。また，自己主張（第Ⅲ因子）においてもそれほど積極的に行われているわけではない結果が示されたと考えられる。同調は友好的な傾向であり，話題切替もある程度相手に配慮した特徴と考えられるが，これらは比較的良くなされる振る舞いであることが示唆された。一方で，送信の仕方，自己主張は利己的な傾向であり，全般的にあまり行われない振る舞いであった。これら

の結果より、相手と興味・関心に相違がある話題に遭遇した際の対応は、上手に対応することで、相手と良好な関係を維持するような振る舞いをしていると捉えることができる。とりわけ、オンラインでのやり取りであることを踏まえると、慎重な振る舞いをすることは重要であり、そのような傾向が示されたと考えられる。

3. 3 情報収集に関する傾向

情報収集に関する各項目の素点平均に基づく傾向は図2に示す通りであった。「Q3.興味(関心)のないものでも話題になっているものはチェックする」「Q4.親しい人とおしゃべりの話題のために情報をさがす」という情報収集が低い傾向であるのに対し、「Q1.興味(関心)のある情報は自ら検索してでも欠かさずチェックする」「Q5.情報の信頼性は注意する」が高い傾向であることが明らかとなった。続いて、これらの項目について1要因分散分析を行った結果、有意だった ($F(5,720)=43.94, p<.001, \eta^2=.17$)。そこでHolm法による多重比較をした結果、Q2とQ6間を除いてすべての項目間で有意差が見られた ($p<.05$)。これらのことから、主として興味・関心の高い情報を積極的に収集する傾向が強く、その際、ある程度情報の信頼性に対して気を配る振る舞いが見られる。「Q2.興味(関心)のあるなしに関わらず、新しい情報が気になる」が低くなかった点は、情報に対しての新規性を重視する傾向が示唆される。一方で、「Q6.あらかじめ登録された(自動通知される)情報をなんとなくチェックする」という受動的な情報収集の傾向が低くなかったことも明らかとなった。スマートフォンなどで日常的に情報へのアクセスが頻繁に行われる中であって、情報に対する振る舞い方の現状を一部ではあるものの明らかにすることができたと考えられる。

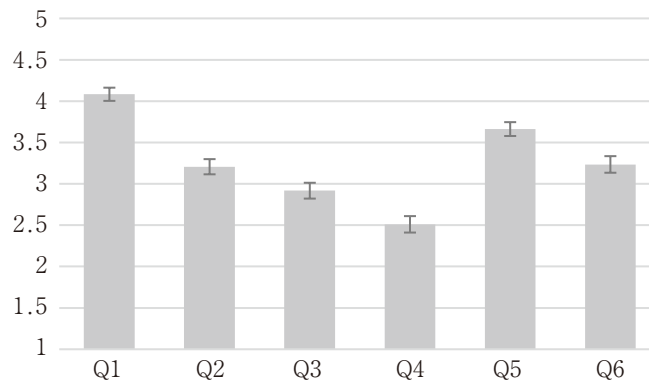


図2 情報収集に関する傾向

エラーバーは標準誤差を示す。

3. 4 社会的スキルと相手と興味・関心に相違がある情報に対する振る舞い方の傾向との関連性

はじめに、社会的スキル尺度の全体の指標を独立変数、相手と興味・関心に相違がある情報に対する振る舞い方の各因子得点を従属変数とし、回帰分析を行った。その結果、第Ⅱ、Ⅲ因子において有意だった(表3)。メッセージのやり取りにおいて、社会的スキルが高い者ほど上手に同調(第Ⅱ因子)や自己主張(第Ⅲ因子)する傾向が示された。各因子の特徴は3.2で示したが、社会的スキルが高い者ほど他者と上手に関わる振る舞いができるため、同調因子においてその特徴が示されたと捉えられる。一方、自己主張は状況によっては、他者との良好な関わりを妨げる振る舞いと考えられる。3.2においても、全般的に自己主張の振る舞いは少ないことが示されている。この点を踏まえると、社会的スキルが高くなければ、他者と良好な関係を維持、構築するための確かな自己主張を抑制する可能性が示唆される。また、スキルの高い者であっても、自己主張は必ずしも積極的に行われるわけではなく、回避傾向があると考えられる。

続いて、社会的スキル尺度の3因子の因子得点を独立変数、相手と興味・関心に相違がある情報に対する振る舞い方の各因子得点を従属変数として、ステップワイズ法(変数増減法)による重回帰分析を行った。その結果、表4に示された通り、従属変数として採用した4つの因子のうち、3つの因子において有意となるモデルが抽出された。なお、今回対象とした独立変数間は最大でVIF=3.02であり、多重共線性の可能性は低いと判断した。同調に関しては、トラブル対処力が高い者ほどより上手に同調する手立てができる傾向が示された。自己主張においては、コミュニケーション力が高い者ほど的確な自己主張をする傾向が明らかとなった。これらは、既に回帰分析でも同様の傾向であり、社会的スキルの具体的な下位概念との関連が示されたと捉えられる。話題切替においては、コミュニケーション力が高い者ほど話題切替する傾向が示された。一方、問題解決力の高い者ほど話題切替を抑制する傾向が示さ

れており、話題切替という問題解決ではなく、別の方法で解決の糸口を探る振る舞いをしている可能性が考えられる。

表3 社会的スキルと相手と興味・関心に相違がある情報に対する振る舞い方の回帰分析による結果

独立変数	従属変数	偏回帰係数	決定係数 (R^2)	F値
社会的スキル	同調 (Ⅱ)	.21	.04	$F(1,143) = 6.73^*$
	自己主張 (Ⅲ)	.23	.05	$F(1,143) = 7.89^{**}$

* : $p < .05$ ** : $p < .01$

表4 社会的スキルの下位概念と相手と興味・関心に相違がある情報に対する振る舞い方の重回帰分析による結果

	標準偏回帰係数		
	同調	自己主張	話題切替
問題解決力			-.37**
コミュニケーション力		.22**	.32*
トラブル対処力	.28***		
決定係数 (R^2)	.07	.04	.05
F値	$F(1,141) = 12.42^{***}$	$F(1,141) = 7.34^{**}$	$F(2,140) = 19.29^{***}$

* : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$

3. 5 社会的スキルと情報収集の傾向との関連性

はじめに、社会的スキル尺度の全18項目の平均値を独立変数、情報収集の行動に関する尺度それぞれを従属変数とし、回帰分析を行った。その結果、表5の通り4項目において有意だった。社会的スキルの高い者ほど有意に「Q2.興味(関心)のあるなしに関わらず、新しい情報が気になる」傾向、また、「Q3.興味(関心)のないものでも話題になっている情報はチェックする」傾向が高いことが示された。また、社会的スキルの高い者ほど、より「Q5.情報の信頼性は注意する」有意傾向、「Q6.あらかじめ登録された(自動通知される)情報をなんとなくチェックする」有意傾向が示された。

表5 社会的スキルと情報収集の行動の回帰分析による結果

独立変数	従属変数	標準偏回帰係数	決定係数 (R^2)	F値
社会的スキル	Q2	.24	.05	$F(1,144) = 8.61^{**}$
	Q3	.32	.09	$F(1,144) = 16.08^{***}$
	Q5	.16	.02	$F(1,143) = 3.67^\dagger$
	Q6	.14	.01	$F(1,144) = 3.05^\dagger$

† : $p < .10$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$

続いて、社会的スキル尺度の3因子の因子得点を独立変数、情報収集の行動に関する尺度それぞれを従属変数として、ステップワイズ法(変数増減法)による重回帰分析を行った。その結果、表6に示された通り、4つの項目において有意となるモデルが抽出された。これらは、回帰分析で有意だった従属変数と同一項目であった(表5参照)。なお、今回対象とした独立変数間は最大でVIF=2.84であり、多重共線性の可能性は低いと判断した。コミュニケーション力の高い者ほど有意に「Q2.興味(関心)のあるなしに関わらず、新しい情報が気になる」傾向が高かった。また、コミュニケーション力の高い者ほど有意に「Q3.興味(関心)のないものでも話題になっている情報はチェックする」傾向が高いことが示された。興味・関心のあるなしに関わらず、純粋にたくさんの情報を得ることで、話題が豊富になることも、他者との良好なコミュニケーションをするために重要な要素である可能性がある。問題解決力の高い者ほど、より「Q5.情報の信頼性は注意する」傾向が明らかとなった。この振る舞いは問題解決のための行動そのものとも捉えることができるだろう。問題解決力の高い者ほど、「Q6.あらかじめ登録された(自動通知される)情報をなんとなくチェックする」傾向が強く、情報にアクセス・判断することと、問題解決能力との関係性が示された。一方、トラブル対処力の高い者ほど、そうした情報収集の振る舞いは控える有意傾向を示した。多くの情報があふれる中であって、受動的であり、また、明確な目標もなく、ただ情報にアクセスすることは、トラブルを招く可能性が

高い。未然に防ぐ意味において、トラブル対処力の高い者ほどこのような情報収集の行動を抑制できる可能性があると考えられる。逆に、トラブル対処力が十分にない者ほど、受動的に情報へアクセスする傾向が強いと捉えることができる。

今回は、「Q4.親しい人とおしゃべりの話題のために情報をさがす」という他者と直接的に関わりのある文脈での情報収集の行動は、社会的スキルと関連が見られなかった。その一方で、他者と直接関わりのある情報収集の行動には該当しないと考えられる4項目において、社会的スキルの下位概念である問題解決力、コミュニケーション力、トラブル対処力のすべてに関連が見られた。これらことから、情報収集の行動がさまざまな社会的スキルと関係している可能性を捉えることができたと考えられる。

表6 社会的スキルの下位概念と情報収集の行動の重回帰分析による結果

	標準偏回帰係数			
	Q2	Q3	Q5	Q6
問題解決力			.20*	.35**
コミュニケーション力	.24**	.33***		
トラブル対処力				-.21†
決定係数 (R ²)	.05	.10	.03	.06
F値	$F(1,142) = 8.52^{**}$	$F(1,142) = 17.42^{***}$	$F(1,141) = 5.98^*$	$F(2,141) = 5.25^{**}$

† : $p < .10$ * : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$

3. 6 総合的考察

ここでは、行動達成性の目標とコンサマトリー性の目標の2つの目標に着目して、他者との関わり方を踏まえた情報収集の行動・振る舞い傾向や、相手と興味・関心に相違がある情報に対する振る舞い方の傾向について検討する。今回の6種類の情報収集の行動のうち、「Q1.興味(関心)がある情報は自ら検索してでも欠かさずチェックする」「Q2.興味(関心)のあるなしに関わらず、新しい情報が気になる」「Q3.興味(関心)のないものでも話題になっている情報はチェックする」「Q4.親しい人とおしゃべりの話題のために情報をさがす」については、何らかの明確な目標があって情報収集を行っていることから、行動達成性の目標の行動と捉えることができる。また、「Q5.情報の信頼性は注意する」においても、行動達成性の目標に合致するかどうかの行動と捉えられる。なお、この中で、直接他者とのコミュニケーションを前提とした目標のある行動はQ4のみである。一方、「Q6.あらかじめ登録された(自動通知される)情報をなんとなくチェックする」については、受動的であり、また、明確な目標があるわけではないことから、コンサマトリー性の目標の行動と捉えることができる。今回の結果をこの2種類の目標を基に捉え直すと、いずれの目標の行動であっても、社会的スキルとの関連性が示されていることがわかる。したがって、情報収集が個人の興味・関心(行動達成性の目標)や無目的(コンサマトリー性の目標)で行われているという捉え方に留まらず、情報収集の延長線上にはさまざまな対人関係、社会的スキルが関係、影響していると捉えられる可能性があると考えられる。

一方、相手と興味・関心に相違がある情報において、同調や自己主張などの振る舞いと社会的スキルとの関連性が示された。これらの振る舞いはコミュニケーション過程ではあるものの、相手から何らかの情報を得る(受信する)という点を踏まえると、情報収集の一種と捉えることもできる。すなわち、調査対象者自身が興味・関心のない事柄であったとしても、他者との関わりの中で同調傾向、すなわち、情報収集する振る舞い(相手の情報を受け入れる)、が見られたと解釈することができるだろう。この時、情報を他者との良好な関係を維持・構築するためという目的においては、収集するという行動達成性の目標に該当するケースと、おしゃべりの中で出てきた情報を収集するというコンサマトリー性の目標に該当するケースいずれもあり得ると捉えることができるだろう。

4 おわりに

本研究では、特に、対人関係のスキルの一つである社会的スキルに着目し、情報を他者との関係性の中でどのように捉えているかを探ることを目的とした。そして、他者と興味・関心に相違がある情報が話題となった際のコミュニケーション過程における振る舞いの特徴、および、他者との関わりを踏まえた情報収集の行動傾向についての特徴を

探り，以下の結果が得られた。

- (1) 相手と興味・関心に相違がある情報に対する振る舞い方の傾向は，4 因子で示された。このうち，同調，話題切替が高く，送信の仕方，自己主張は低い傾向を示した。社会的スキルとの関連性については，社会的スキルの高い者ほど，同調や自己主張の傾向が高いことが示された。さらに社会的スキルの下位概念との関連性について分析した結果，同調はトラブル対処力，自己主張はコミュニケーション力，話題切替は問題解決力，コミュニケーション力と関連があった。
- (2) 情報収集の振る舞いの傾向は，興味・関心のある情報を収集する傾向が高かった。社会的スキルとの関連性については，社会的スキルの高い者ほど，新しい情報が気になる傾向，話題になっている情報をチェックする傾向が高かった。さらに社会的スキルの下位概念との関連性について分析した結果，コミュニケーション力が高い者ほど，新しい情報が気になる傾向，話題になっている情報をチェックする傾向が高かった。また，問題解決力が高い者ほど，情報の信頼性に注意する傾向，あらかじめ登録されている情報を何となくチェックすることが多い傾向が示された。

さらに上記の結果を踏まえ，情報収集の振る舞いを行動達成性の目標とコンサマトリー性の目標に分類してその傾向を検討したところ，いずれの目標であっても，社会的スキルと関連があること示唆された。今回採用した情報収集の振る舞いや相手と興味・関心に相違がある情報における振る舞いは，かなり限定的であった。また，行動達成性の目標とコンサマトリー性の目標の観点から捉えた場合，行動達成性の目標に偏った内容になっていた。したがって，情報収集を含む情報に対する振る舞いについては，行動目標という観点から幅広く捉えていく必要がある。一方，他者との関わりについては，社会的スキルに焦点を当てたが，対人関係においてはさまざまなスキルがある。したがって，今後は他の対人関係に関わるスキルとの関連性にも着目していく必要がある。

引用文献

- (1) 文部科学省（2019）次世代の教育情報化推進事業（情報教育の推進等に関する調査研究）成果報告書 情報活用能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントの在り方と授業デザインー平成30年度 情報教育推進校（IE-School）の取組よりー。
- (2) 内閣府（2020）令和元年度 青少年のインターネット利用環境実態調査報告書
<https://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/r01/jittai-html/index.html>（最終検索日2020年8月30日）
- (3) 総務省情報通信政策研究所（2019）平成30年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査
https://www.soumu.go.jp/main_content/000644168.pdf（最終検索日2020年8月30日）
- (4) 文部科学省（2015a）情報活用能力調査（小・中学校）調査結果（概要版）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1356188.htm（最終検索日2020年8月30日）
- (5) 文部科学省（2017）情報活用能力調査（高等学校）報告書
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/_icsFiles/afiedfile/2017/01/18/1381046_02_1.pdf（最終検索日2020年8月30日）
- (6) 文部科学省（2015b）21世紀を生き抜く児童生徒の情報活用能力育成のために（平成26年度）前編・後編
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2018/08/07/1369631_5_1.pdf（最終検索日2020年8月30日）
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2018/08/07/1369631_6_1.pdf（最終検索日2020年8月30日）
- (7) 池田謙一（1998）4章 決める<こころ>。池田謙一・村田光二「こころと社会 認知社会心理学への招待」。東京大学出版会。
- (8) 古谷嘉一郎・坂田桐子（2006）対面，携帯電話，携帯メールでのコミュニケーションが友人との関係維持に及ぼす効果：コミュニケーションのメディアと内容の適合性に注目して。社会心理学研究，22(1)，72-84。
- (9) Levinger（1980）Toward the analysis of close relationships. Journal of experimental social psychology, 16, 510-544.（最終検索日2020年8月30日）
- (10) 下斗米淳（2000）友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究－役割期待と遂行とのズレからの検討：役割期待と遂行とのズレからの検討。実験社会心理学研究，40(1)，1-15。
- (11) 菊池章夫（1988）『思いやりを科学する：向社会的行動の心理とスキル』。川島書店。
- (12) 石川真（2014）社会的スキルの違いがネットワーク上の他者との関わり方に及ぼす影響上越教育大学研究紀要，33，11-19。
- (13) 石川真（2017）ネット上のトラブルを対処するための社会的スキルの傾向に関する研究。上越教育大学研究紀要，36(2)，285-294。

Relation Between Behavioral Tendency Toward Information and Interpersonal Skills

Makoto ISHIKAWA *

ABSTRACT

This study examined the characteristics of one's communication process behavior when dealing with information from others with different interests and when collecting information based on their relationships. Regarding the former, it was found that higher social skills cause a higher tendency to sympathize with the other person and a stronger self-assertion. Meanwhile, the results for a bottom concept of social skills showed an association between coping skills and one's tendency to sympathize with the other person, between communication skills and self-assertion, and between problem-solving skills and changing topics. Higher social skills and higher communication skills lead to a higher tendency toward attention to fresh information and popular news. Finally, higher problem-solving skills were associated with a higher tendency to pay attention to information reliability and aimlessly collected information.

* School Education